

正課外教育の可能性と難しさ ―4年間のラジオ番組制作を振り返って―

山本 珠美（生涯学習教育研究センター准教授）
加藤 昇（工学部4年）
廣瀬 渉（経済学部4年）

1. はじめに

平成25年度に立ち上げたRadio18によるラジオ番組制作は4年目となり、プロジェクト創設時から活動が続けてきた学生2人（加藤・廣瀬）は平成29年3月に香川大学を卒業する。本稿は正課外活動として実施した番組制作プロジェクトの4年間を振り返り、その可能性と難しさについて検討するものである。

平成25年7月に放送開始した当初は加藤・廣瀬のわずか2名¹⁾だったRadio18は、平成28年11月現在、14名の学生（経済学部6名、工学部4名、法学部2名、教育学部1名、農学部1名）からなる団体になっている。本プロジェクトを立ち上げた経緯については山本・藤本（2014）に述べたとおりであるが、平成19年度にはじめて教育学部の正課教育（社会教育特講ⅡA）におけるラジオ番組制作が学生に好評であったこと、学生の総合的な能力形成に有効な取組であると実感していたことから、他学部の学生を含めた全学的な取組にしたいと思い、山本が「個人的に」はじめた取組である。当初1年間限定のつもりであったが、加藤・廣瀬の予想以上の成長に1年で止めてしまうのはもったいないと感じ、平成26年度以降も継続することになった。

複数学部の学生が関与し、かつ1年間を通しての活動となることから、正課教育の枠組みで実施することはほぼ不可能であり、正課外教育として行っている。正課外だからこそ制約なく様々な挑戦できた反面、正課外であるがゆえの難しさを感じることも少なくない。香川大学は中期目標（平成28～32年度）の中で「地域社会で求められる人材を育成するために、正課・正課外教育を充実させる」（傍点筆者）ことを掲げている。本稿が少しでも今後の正課外教育の参考となれば幸いである。

2. 4年間の活動内容

Radio18の活動は、主にFM高松で放送する番組「香大生 presents: Art Time Junction」の制作であるが、そのほか、番組制作初心者のための実践講座や、プロアナウンサーらを招聘して行う勉強会等のスキルアップ研修、同様の活動をしている他大学の学生との交流も行っている。4年間の活動内容を紹介する。

2-1. 番組制作

4年間に制作した番組の放送時期、時間、本数、等の概要については、表1のとおりである。本取組は平成25年度の「瀬戸内国際芸術祭2013」大学提案プロジェクトの採択をきっかけにはじまったものである。そのため1年目は瀬戸内国際芸術祭の会場を訪問した体験談や、他の大学提案プロジェクトの紹介を内容とする番組を制作した。2年目、3年目は瀬戸内国際芸術祭に拘らず、香川の魅力を大学生目線で伝えるというコンセプトで制作した。4年目の平成28年度は再び瀬戸内国際芸術祭の開催年となったため、芸術祭期間中については会場となる離島を訪問して、その体験を伝えるという1年目の内容を復活させ、期間外については芸術祭以外の香川の魅力を伝えるという方針を取った。

番組内容はメンバーの取材に基づく場合と、ゲストを招いてインタビュー形式で進める場合がある。前者の場合、離島を訪問する、うどん打ち体験をする等、番組のために特別に取材をする時もあるが、番組コンセプトに合う学生各自の取組（ゼミ活動、サークル活動、等）を取り上げることもある²⁾。後者の場合のゲストは主に香大生である（一部他大生の場合もあり、2-3(3)(4)で後述）。

番組制作にはお金がかかる。主たる支出はFM高松に支払う電波放送料(30分番組3,000円＋税、60分番組5,000円＋税、再放送は33% off)と、取材時の交通費・入館料である。2年目こそ主たる活動費が山本の個人研究費となったが、「瀬戸内国際芸術祭」大学提案プロジェクトおよび香大生の夢チャレンジプロジェクトという大学による経費的支援が、本取組を可能とする基盤となっている（私費は主に研修旅行の費用である）。ただし、通年で放送を行うためには、年度当初の経費的支援がない時期をどう乗り切るかという問題が発生する。はじめて通年放送に取り組んだ平成28年度は私費（教員、学生）で賄ったが、検討すべき点と思われる。

番組は生放送ではなく、全て収録放送である。FM高松のスタジオは使用可能な時間に制約があるため年に1、2度程度使うのみであり、主に生涯学習教育研究センター講義室にその都度機材をセットして収録している。収録・編集した番組は、山本が最終チェックをし、FM高松にデータを渡している。



図1 公開収録（平成26年5月26日）

表1 年度別「Art Time Junction」番組概要

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度 ^{注3)}
番組コンセプト	瀬戸内国際芸術祭 2013	香川の魅力を 伝える	香川の魅力を 伝える	香川の魅力を 伝える／瀬戸内 国際芸術祭 2016
放送時期	7～8、10～11月	5～3月	7～3月	4～3月
通常 放送時間	瀬戸内国際芸術祭 (夏・秋) 期間中、 毎週水曜日 22:00～22:30	【5～9月】 第1水曜日 22:00～22:30 【10～2月】 第1、3水曜日 22:00～22:30	第1水曜日 22:00～23:00	第1、3水曜日 22:00～22:30
再放送	同週の土曜日 15:30～16:00	同週の土曜日 15:30～16:00	—	—
特番 放送日時	—	3/27 (22:00～23:00) ただし再放送なし	—	9/28 (22:00～23:00) 3/29 (22:00～23:00)
番組本数	11本 ^{注1)} ^{注2)}	16本(通常15本 +特番1本) ^{注2)}	9本 ^{注2)}	26本(通常24本 +特番2本) ^{注2)}
総放送時間	10時間(再放送 4.5時間を含む、 実質5.5時間) ^{注1)}	16時間(再放送 7.5時間を含む、 実質8.5時間)	9時間	14時間
活動費	「瀬戸内国際芸術祭 2013」大学提案 プロジェクト ／研究費(山本)	研究費(山本) ／私費	香大生の夢チャレ ンジプロジェクト ／私費	香大生の夢チャレ ンジプロジェクト／ 「瀬戸内国際芸術祭 2016」大学提案 プロジェクト／私費

注1) 年度当初の計画では、10本制作しそれぞれ再放送する予定であったが、2-3(3)で述べる山口大学の学生により長く出演してもらうため、4本目の再放送分を5本目として別番組を制作した(4、5本目は再放送なし)。

注2) 表では30分番組と60分番組が混在しているため、30分を1本(単位)としてカウントし直すと、平成25年度から平成28年度まで、11本、17本、18本、28本となる。

注3) 平成28年度は、3月まで年度当初の計画通り進んだ場合である。

2-2. スキルアップ研修

(1) 基礎スキルのための実践講座

現Radio18メンバーは全員ラジオ番組制作の未経験者である。新しくメンバー入りした1年生を対象に、毎年、番組制作の基礎スキルを身につけるための実践講座を実施している(ただし1年生が不在だった平成27年度は除く)。

番組制作の基礎スキルとは具体的にどのようなものか。

山口県宇部市のコミュニティ放送局FMきららの井上悟は、コミュニティ放送局に求められる人材を「オールディレクター主義」という言葉を用いて説明している(井上・三浦2007、148頁)。オールディレクター主義とは、「自分で考え、自分で資料を集め、自分で取材し、自分で報告し、自分で完結させる」ことであり、「1人で、ディレクター、パーソ

ナリティ、アシスタント、リポーターの全てをこなす。もちろん、ミキサーも担当する」、そのような人材のことである。大手の放送局は話す人は話す人、編集する人は編集する人と専門分化しているが、コミュニティ放送局では全てをこなせる人材こそが必要であると井上は述べている。

本取組も同様の考え方である。誰かから与えられたテーマについて部分的な役割を果たすのではなく、自ら企画を立て、その企画については責任を持って 30 分（60 分）の番組にする。そもそも話し方を上達させるためには、それだけをひたすらトレーニングするよりは、編集という作業を経験することによって、どのような話し方をすべきか客観的に理解することができる。もっとも、メンバーの中には特定のスキルを重点的に伸ばしたいという学生も出てくるため、上級生については臨機応変に対応しているが、原則として、全員が番組制作について一通りのことはできるようになることを目標としている。

具体的には、①発声・滑舌、②番組企画力、③取材力、④トーク力（個人で話をする力）、⑤ MC 力（複数話者による対話を進行する力）、⑥インタビュー力・聴く力（ゲストインタビュー形式の番組の場合）、⑦ミキサー操作、⑧番組編集力、等々である。実践講座では、このうち①②④⑦を主に扱っている。残りの③⑤⑥⑧については、番組制作の場数を踏みながら徐々に覚える（スキルアップする）という現状になっている。



図 2 平成 26 年度実践講座の様子

(2) プロアナウンサーらによる勉強会

山本は平成 22 年 10 月より FM 高松のボランティア・パーソナリティとして月 2 回の 30 分番組を担当しており、基礎スキルの実践講座を行うことは可能であるものの、プロフェッショナルとしてラジオ局で働いた経験はない。その不足を補うため、学生にプロはどのように番組制作をしているのか、プロアナウンサーを招聘して勉強会を実施した（平成 27 年 3 月 16 日、元テレビ高知アナウンサー高曾根里恵氏；平成 28 年 1 月 23 日、FM 徳島アナウンサー今末真人氏）。高曾根氏は番組出演も可だったため、収録を行いながら指導をして頂いた。今末氏は勤務先の規程上出演は叶わなかったが、話し方について一人ひとり丁寧に指導して頂いた。

なお、過去2年間がアナウンサーだったことから、平成28年度は岡山・香川で主にテレビ・ラジオを舞台に活躍している芸人のリンクアップとっしー氏を招聘して実施した（平成28年11月27日）。



図3 高曽根里恵氏（左から2番目）



図4 今末真人氏



図5 リンクアップとっしー氏

(3) 研修旅行

表2のとおり、4年間で計6回の研修旅行を実施した。行き先は学生と相談しながら山本が選定した。6回のうち4回（京都、甲府、山口、広島）は同様の取組を実施しているコミュニティFM局で他大生と交流し（出演含む）、残り2回（東京、大阪）は将来の就職先としてマスコミを志望している学生が多いため、会社見学を行った。また、大阪では常設の寄席も訪れ、壺家の芸に触れた。



図6 NHK スタジオパーク

表2 研修旅行一覧

年度	場所	訪問日	訪問先	内容	学生数
H25	京都	平成 26 年 2 月 24 日	京都三条ラジオ カフェ	番組「下鴨セブン～府大生 7 人による〇〇な話～」を制作している京都府立大学公共政策学部の学生との交流、ワンコインメッセージ（生放送）	2 名
H26	甲府	平成 26 年 5 月 24-25 日	エフエム甲府(山梨学院大学内)	生放送番組「Rec ☆ y のみんなゼミ」出演、山梨学院大学・山梨英和大学・山梨県立大学の学生との交流	2 名
	東京	平成 26 年 9 月 9-10 日	NHK 放送博物館、NHK スタジオパーク、テレビ朝日、朝日新聞社	左記施設の見学	12 名
	大阪	平成 27 年 3 月 30 日	読売テレビ、天満天神繁昌亭	左記施設の見学	11 名
H27	山口 広島	平成 27 年 9 月 24-25 日	<山口>山口大学工学部、FM きらら <広島> FM ハムスター（広島経済大学内）	<山口>山口大学工学部のラジオ番組「ススメ！工学部」担当の瀧本浩一准教授への聞き取り、FM きらら見学 <広島>生放送番組「アフタヌーンハムスター」収録番組「雑草魂」出演、興動館プロジェクト（コミュニティ FM 放送局運営プロジェクト）および貫名ゼミの学生との交流	7 名
	広島		FM ハムスター（広島経済大学内）	生放送番組「アフタヌーンハムスター」「はむっしゅ！ de Wednesday」出演、興動館プロジェクト（コミュニティ FM 放送局運営プロジェクト）の学生との交流	

注）本稿校正中、大阪・京都の研修旅行（平成 29 年 2 月 19-20 日；NHK 大阪放送局、天満天神繁昌亭、ラジオミックス京都）が決定した。ラジオミックス京都は、平成 28 年、「地域と大学の連携」をコンセプトに京都市北区に開局したコミュニティ放送局である。佛教大学等との交流を予定している。

2-3. 他大生との交流

上記の研修旅行のうち強く印象に残っているのは、同様の取組を行っている他大生との交流である。研修旅行による交流、香川大学を訪れた他大生との交流について紹介する。

(1) 京都府立大学

京都三条ラジオカフェは京都市上京区・中京区・下京区を主な放送エリアとするコミュニティ放送局であり、日本初の NPO 放送局（特定非営利活動法人京都コミュニティ放送）として知られている。エリア内には多数の大学が存在し、大学生が制作する番組も数多い。

平成 25 年度の放送を終え平成 26 年度の継続を決めた際、今後の活動の参考とするため他局・他大学の事例を知りたいと考え、平成 26 年 2 月に山本・加藤・廣瀬および当時本プロジェクトに関わっていた教職員 2



図7 京都府立大学生との交流

名の5名で同局を訪問し、局スタッフに大学との連携について話を伺った。あわせて「下鴨セブン～府大生7人による〇〇な話～」を担当している京都府立大学公共政策学部の学生3名と、番組制作の具体的な方法について情報交換した³⁾。

同局にはワンコインメッセージという1分間生放送体験の仕組みがある。収録放送とは違い、一発勝負、やり直し不可の生放送の緊張感を、わずか1分間とはいえ初めて経験したことは、強く印象に残っている。

(2) 山梨学院大学ほか

京都三条ラジオカフェに続き他局・他大学の事例を知るために、平成26年5月には山梨学院大学クリスタルタワーに設置されているコミュニティ放送局エフエム甲府（学校法人山梨学院や山梨中央銀行、山梨放送等が出資者の株式会社）を訪問した。同局では山梨学院大学をはじめ県内の大学生が制作する「Rec ☆ y のみんなゼミ」が、7年以上継続して放送されている。構成、番組進行、トーク、すべて学生のみで行われ、学校や地域情報、アニメや音楽など大学生の興味ある話題を学生の視点で制作している⁴⁾。

同番組の見学のため山本・加藤・廣瀬の3名で訪問したところ、当日現地にて出演を打診されたため、加藤・廣瀬の2名は急遽ワンコーナー（15分）に出演することとなった。はじめての他局の番組出演、しかも事前準備がほとんどない状態で生放送に出るということで、極度の緊張に苛まれたが、大変貴重な経験となった。



図8 Rec ☆ y のみんなゼミ

(3) UNGL による交流：山口大学、京都外国語大学

(1)(2) がこちらから訪問して実施した交流であるのに対し、UNGL（文部科学省大学間連携共同教育推進事業「西日本学生リーダーズ・スクール～西日本から世界に翔たく異文化交流型リーダーシッププログラム～」の略称）による交流は他大生が香川大学に来て行った交流である。UNGLでは各連携大学が実施しているリーダーシップ育成にかかる正課外教育を連携校に開放するという取組をしている。リーダーシップを形成するスキルとして「多人数に向けての話し方」は欠かせない。そこで、本取組をUNGL事業の一環として位置づけ、大学の夏休み期間中にRadio18と一緒に番組制作する他大生を募集した。平成25年度は山口大学の学生2名、平成26年度は山口大学の学生1名（前



図9 山口大学の学生と一緒に（H27）

年度に参加した学生の一人)、平成 27 年度は京都外国語大学の学生 1 名が参加した。

連携校からの参加が 3 年間を通して延べ 4 名（実数は 3 名）と少なく、これ以上続けても効果を見込めないこと、次に説明する広島経済大学との交流を本格化させることとしたため、平成 28 年度は UNGL による他大学交流は実施していない。

(4) 広島経済大学

最初のきっかけは、平成 27 年 5 月に広島経済大学経済学部メディアビジネス学科講師の貫名貴洋先生から生涯学習教育研究センターに届いた「香川大学の学生によるラジオ番組制作の現場を見学させて欲しい」という一通のメールであった。

広島経済大学には学内に広島市安佐南区を放送エリアとするコミュニティ放送局 FM ハムスター（特定非営利活動法人エフエムハムスター）が設置されており、学生・教職員が運営している。同大学には学生の正課外活動に資金的援助を行う「興動館プロジェクト」⁵⁾という仕組みがあり、「コミュニティ FM 放送局運営プロジェクト」はその公認プロジェクト A（50 名以上、最高 1000 万円）の一つとなっている。このように学生・教職員が、単に一部の番組を制作するのみならず、放送局の運営そのものに関わっている点が、山梨学院大学内に設置されているエフエム甲府との大きな違いである（エフエム甲府は学内に設置されているものの、その運営を教職員や学生が担っているわけではない）。

貫名先生の依頼には二つ返事でお受けするとともに、我々も FM ハムスターにおける番組制作の様子を見学させて欲しいとお願いした。貫名先生は 8 月 23 日に香川大学に来られ、9 月 2 日放送分の収録を見学した（先生のみ来学）。その約 1 ヶ月後 9 月 25 日には Radio18 のメンバー 7 名が広島経済大学を訪問し、生放送「アフタヌーンハムスター」（平日毎日 12:30 ～ 13:30）に出演、同番組終了後は、貫名ゼミが制作する収録番組「雑草魂」（放送日：平成 27 年 10 月 12 日 15:00 ～ 16:00）にも参加した。放送中にたびたび生じるトラブルは放送時間内にその場ですぐに解決しなければならない。緊張感ある現場は、大いに刺激となった。

平成 28 年度も引き続き広島経済大学を訪問し（9 月 14 日）、前年度同様、生放送番組（アフタヌーンハムスター、はむっしゅ！ de Wednesday の 2 番組）に出演した。あわせ



図 10 はむっしゅ！ de Wednesday



図 11 Radio18 と貫名ゼミ

て貫名ゼミの学生 15 名が香川大学に来学し（9 月 19 - 20 日）、Radio18 が制作するラジオ番組に出演してもらうという、双方向の交流を行った。香川大学にて制作した番組は、FM 高松の Art Time Junction 特番として 9 月 28 日 22:00 ~ 23:00 に放送されるとともに、FM 高松の許可を得た上で、FM ハムスターでも 10 月 10 日 15:00 ~ 16:00 に OA された。

2-4. その他

活動については、ポスターを学内に掲示するとともに、Ameba ブログ（平成 25 年度）、Facebook（平成 26 年度～）、Twitter（平成 27 年度～）、大学公式サイトで積極的に広報することに努めた。そのほか、大学広報誌への掲載（かがアド第 23 号；KADAIGEST（カダイジェスト）2014 年 5 月号、2016 年 5 月号）、平成 27 年度制作の大学広報動画⁶⁾への出演、読売新聞による取材（平成 27 年 8 月 30 日）、ホームカミングデーでの発表（平成 28 年 10 月 30 日）、平成 29 年度 e-learning 教材（主題 C「地域理解」）への協力もある。

なお、平成 27 年 8 月 6 日に香川大学 OLIVE SQUARE 多目的ホールにて開催された「2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会／連携大学地域巡回フォーラム in 香川」の司会を Radio18 の学生が務めたことから、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の公式サイトでも活動が紹介された。



図 12 学内掲示用ポスター（H27）

香大生 情熱オンエア



番組を収録する学生たち。元氣な笑い声が講義室に響く（高松市の香川大で）

第1水曜夜 FM番組3年目

香川大生たちが、コミュニティFMの番組「Art Time Junction」の自主制作に取り組んでいる。学生の目を通した瀬戸内国際芸術祭や東日本大震災、ボランティア活動などを取り上げる。音声だけで表現する苦労やリポートでの失敗は絶えないが、「やっぱりラジオが好き。まだまだやりたいことがある」と番組作りに情熱を傾ける。（連博司）

瀬戸芸、防災…地域に発信

「香大生プレゼンツ、アートタイムジャンクション」。23日に行われた収録の冒頭、タイトルコールが同大学の講義室内に元気よく響いた。「さて、今日はゲストをお迎えしてお送りしています」。ヘッドホンをかけ、マイクの前に座った学生たちの冗談を交えたトークに、出演者たちの間で笑いが絶えなかった。中心になって取り組んでいるのは、共に3年で代表の広瀬渉さん(21)と、副代表の加藤昇さん(20)。毎月第1水曜の午後10時から1時間、和気あいあいとした雰囲気を取りこみながら、2013年、同大学生涯学習教育研究センターの山本珠美准教授(45)が学生に

「コミュニティFM 1992年に始まった地域密着型のFM放送。99年に電波の送信出力が市町村域をカバーできるようになり、開局が相次いだ。最大で半径15キロ程度で聴取でき、災害時には被害状況やライフライン（生活物資供給路）に関する情報を提供する。日本コミュニティ放送協会によると、全国に約290局。県内には、エフエム高松のほか、坂出市のエフエム・サン（76・1が）の2局がある。

よる番組作りを学内で企画したことに始まる。応募してきた広瀬さんと加藤さんにとって、ラジオの番組制作は初めて。瀬戸内国際芸術祭の開催に合わせ、携わる学生たちを紹介し、会場の島々を取り上げた。取材に行く船に乗り遅れたり、言葉だけで芸術作品を紹介する難しさにぶつかったりもしたが、徐々に「伝える」ことの楽しさに目覚めた。2年目は、東日本大震災の被災地にボランティアパスで赴いたり、防災士として活動したりしている同大生たちと番組内で意見を交わした。メンバーが11人に増えた今年には、香川大生ならではの目線で番組を企画。田植えをしたことのない男子学生が、東かがわ市で田んぼに入り、感じた新鮮さや驚きを伝えるなどしてきた。番組制作を通じて、メンバーは自身の成長も実感している。加藤さんは「企画の立案や取材を通して、自分で考えて行動できるようになった」と話す。「最初は手取り足取り基本をたたき込んだ」という山本准教授も、最近ではなるべく指導をせず見守るようになったという。

来年は、瀬戸内国際芸術祭が再び帰ってくる。広瀬さんは「前は芸術家の話を聞くだけで精いっぱいだったけど、来年は来場者の声なども幅広くリポートする。リスナーを増やし、地域に愛される番組にしたい」と意気込む。次の9月2日は、2年生のメンバーが2020年の東京五輪について議論し、県立ミュージアム（高松市）で開催中の特別展をリポートする。高松市では「エフエム高松」（81・5が）で聞くことができる。他地域でも、コミュニティFMを集めたサイト「サイマルラジオ」で楽しめる。

図 13 読賣新聞（平成 27 年 8 月 30 日）〔転載許諾済〕

香川大学・学生グループがつくるラジオ番組「Art Time Junction」の放送

2015年9月2日

ツイート

いいね! 2

概要

香川大学では学生が行う魅力的・独創的なプロジェクトを支援する「香大生の夢チャレンジプロジェクト事業」があり、学生グループRadio18（ラジオエイティーン）が支援プロジェクト事業に採択された。当グループでは平成25年度、26年度と2年間にわたりラジオ番組の自主制作を行ってきて、平成27年度においては大学の支援を受けて、FM高松にて合計9本のラジオ番組を制作・放送した。当グループのメンバーの二人が平成27年8月6日の地域巡回フォーラムin香川の司会として参加し、フォーラムの内容や参加した学生への取材も行い、9月2日には当フォーラムを取り扱った番組を放送した。

大学名	香川大学
グループ名	Radio18（ラジオエイティーン）
番組名	Art Time Junction（FM高松）
放送日時	平成27年9月2日（水）22時～23時

内容

地域巡回フォーラムin香川では、参加学生が司会を務めるなど、運営の一部に学生が関わるような試みを行い、香川大学の学生グループ「Radio18」のメンバーの二人が司会でフォーラムに参加した。

また、司会がきっかけとなり、当日は参加大学生へのインタビューなどの取材を行い、東京オリンピック・パラリンピックについての番組を制作した。

番組は平成27年9月2日（水）で放送され、フォーラムでの司会の体験談や香川大学で開催された理由、大学運携の目的、参加者の声の紹介、過去のオリンピックでの記憶に残った件や東京2020年大会への期待、大会への今後の関わり方について、メンバー同士でディスカッションが行われた。学生の手により香川から2020年東京オリンピック・パラリンピックについての発信がなされ、非常に価値のある活動となった。

活動の詳細については、[大学の公式ウェブサイト](#)にて。



図 14 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会公式サイトより〔転載許諾済〕

3. 成果と課題

3-1. 成果

本取組の強みは、医学部を除く5学部の学生が関わっているという総合大学の利点を生かした点であろう。同じテーマ・事象を取材しても学部が異なることによって違う視点で見ることができる。正課であろうと正課外であろうと、同じ学部の学生だけで行うのでは得られないメリットである。

経済学部生の廣瀬は、当初「良い番組づくり」がぼんやりとしか想像できなかったが、学年が上がるにつれて、学部講義で得た知識を番組制作に生かすようになったという。企

画を考える際には、誰に何を伝えるのか（ターゲットセグメンテーション）、他番組との棲み分け（差別化戦略）、というように、番組を一つの経済活動と捉えて考えるようになった。学部集中講義で離島民への聞き取り調査を行ったことは、番組でゲストインタビューを行う際に役立ったという。

一方、番組制作で培った自己表現力によって、自信を持って人前で話すことができるようになったという声は共通して聞かれる。授業での発表はもちろんのこと、就職活動（廣瀬）、卒業研究の発表（加藤）を乗り越えることができたのは、活動の賜物であったという。

正課と正課外とが双方向に好影響を与えていることは、大きな成果と言えよう。

3－2. 課題

(1) 正課、他の正課外との両立

反面、課題も多い。第一は正課との両立の難しさである。活動拠点が幸町キャンパス（研究交流棟 6 階）であるため、特に他キャンパスの学生にとっては 2 年次以降が難点となる。工学部生である加藤の「学業が忙しくなるにつれて向上心のキープが難しくなった」「下級生がこれくらいでいいんだと思っているとしたら、申し訳ない」という思いは、他の工学部・農学部生にも当てはまるだろう。

正課のみならず正課外活動との両立も問題である。Radio18 の学生は、良くも悪くも欲張りである。大学生の間にあれもこれもやってみたく、部活・サークルやアルバイト等、学内外の様々な活動に積極的に関与している。そのフットワークの軽さに感服する一方、公に向けて発信するラジオ番組制作は片手間でできるほど甘いものでもない。得てして量と質とは両立しないものである。正課については CAP 制により適切な学修時間の確保を理由に履修登録単位数の上限が設定されているが、正課外は学生次第であり、そこにアルバイト等の学外活動が加わると、個人差が大きいものの、空いている時間は限られる。

活動（番組）の質を高めようとするれば、相当の時間を活動に割かなければならない。番組評価も課題の一つであり、全員で集まって振り返りもしたいのだが、現状を考えると断念せざるを得ない。目標は高く設定したいし、志も高く持ちたいのだが、それに伴って活動時間を増やせばついてこれなくなる学生が続出するだろう。

(2) 学生の主体性、チーム運営の難しさ

ここで問題となるのが、「活動的で忙しい学生たちの集団が、どこまで主体性、自主性を持って活動を進めることができるか」である。Radio18 というチームを運営するにはリーダーシップを発揮する人物が必要である。しかし、最小限とはいえ教員が関与しているゆえなのか「最後は教員がなんとかしてくれる」という甘えがあるように思われる。番組制作にあたっては、企画、取材、収録、編集という番組 1 本分の制作サイクルを考えるだけでなく、年間スパンで役割分担やスケジュール管理、予算執行等を考えるという基盤的な仕事も必要である。前者については一応できているものの、後者が不十分で、番組制作という「美味しいところ」だけに関心が向くという傾向にあるのが実情である。

もっとも、その不十分な部分を教員が主導権を持って決めてしまえば、それなりに上手く動くのも事実である。自分たちで決めることは苦手でも、指示されれば動ける学生たちである（教員の指導力不足と言えばその通りであるが）。もし教員が全く関与しない、100%学生だけで行う活動であれば――。活動を維持するために学生自身が主体的に担うようになるであろうか、それとも活動停止に陥ってしまうであろうか。

なぜ学生は自分たちで決められないのか。一つには、メンバーが複数学部からなることであろう。番組制作にあたって多面的な視野を持てるメリットの反面、時間割やキャンパス位置の関係上、全員のスケジュールを合わせることは難しい。LINE やメールで補うにせよ、対面で話し合うことに比べて効果は低い。学生間の温度差、熱意の差の問題もある。仮に学生たちが忙しいにせよ、優先順位の高い活動には時間を捻出するはずである。1期生の加藤・廣瀬のように苦労しつつゼロから作り上げた学生と、枠組みが出来上がった中に後から入ってきた2期生以降の学生たちとでは、思い入れが違うのはある程度は仕方がない。「学年や学部を超えたチームとしての働きを発揮するため、もっと後輩の育成に力を注ぐべきだった」（廣瀬）という反省は、今後の課題としたい。

4. おわりに～正課外教育の可能性を開花させるために～

本稿冒頭で述べたように、山本は平成19年より正課（教育学部「社会教育特講ⅡA」）でもラジオ番組の制作に取り組んできた。正課では、5か月間（10～2月）、計15回（+α）の授業全体を使っておおむね1人15分の番組（2人で30分番組）を制作する。放送回数は少数にとどめ、1本の番組をじっくりと時間をかけて制作する方法である。評価も厳しく行う。正課外でも同様の方法を取れば良いという考えもあるだろうが、正課外と正課を同じ方法で実施することが望ましいとは思われない。

第一に本数を少なくすると「場数をこなして慣れる」ことができなくなる。当初は質やや難があったとしても、数をこなすうちに徐々に自信がつき、堂に入ったMCに育っていく。授業のように半年限定ではないので、長い目で見るとこの方法が好ましい。

もう一つの理由は、教員がきめ細かく指導することによって、全体的平均的に質は高まるものの、教員のイメージに沿った番組になってしまうという「面倒を見すぎるがゆえのマイナス」である。学生が想像力を存分に発揮し、自由にアイデアを出し合うには、教員は余計な口出しはしない方が良い。廣瀬は「目標設定を自分でできる点」「自分の実現したい内容に合わせてとことんやりこめる点」が正課との違いではないかと述べている。

正課（教員のきめ細かい指導を前提とする）で制作する番組が「一定の質は保証される」とするならば、正課外（教員の関与は最小限とする）で制作する番組は「質は玉石混交だが、ときに教員の想像をはるかに超える番組が生み出される」のである。正課外では評価システムが存在しないため、ろくに取材もせず、企画もいい加減な「手抜き番組」もあるのは事実である。しかし眼を瞠る素晴らしい番組に出会えることもあり、これが正課外の醍醐

味とを感じる。それゆえ、正課の「細部まで指導し、少数を丁寧に作る」とは正反対の「細かい口出しはせず、数をこなす」という方針を正課外では取ってきた。

この方法が果たして正しかったかどうか。学生は「ばたばたしていたがとにかく楽しかった」と言う一方、「慣れるにつれ、惰性でやっている学生もちらほらいるように見える」という反省の弁もある。正課外において学生が主体性を発揮して、最大限の成果を生み出すためにはどのようなサポートが望ましいのか。御批判・御叱正賜れば幸いである。

付記・謝辞

本取組の当初2年間は、既に退職した藤本佳奈（元・キャリア支援センター助教）、大原綾華（元・同事務補佐員）の助力があった。ここに感謝の意を記したい。

注

- 1) 正確にはもう1名学生がいたが、負担が重いという理由により、1回目の放送直後に離脱した。実質、平成25年度は加藤・廣瀬の2名体制であった。
- 2) 例えば、経済学部地域社会システム学科の学生が自ら関わっている瀬戸内地域活性化プロジェクトの活動を紹介する、工学部安全システム建設工学科の学生が高松港の特徴的な構造について解説する、等である。
- 3) 京都三条ラジオカフェについては、公式サイト <http://radiocafe.jp/> の情報による（平成28年11月20日閲覧）。「下鴨セブン～府大生7人による〇〇な話～」は訪問時の番組名であり、平成28年11月現在は「下鴨セブン～京からミになるラジオ～」である。
- 4) エフエム甲府については、公式サイト <http://www.fm-kofu.co.jp/> の情報による（平成28年11月20日閲覧）。「Rec ☆ y のみんなのゼミ」は、平成26年5月の訪問時は毎週土曜日16:00～17:00に生放送で行っていたが、平成28年11月現在は毎週金曜日9:30～10:00の収録放送となっている。
- 5) FMハムスターの成り立ちについては、松井ほか（2011）が詳しい。興動館プロジェクトについては、以下のサイトを参照。<http://www.hue.ac.jp/koudoukan/index.html>（平成28年11月20日閲覧）。
- 6) 大学広報動画は、平成28年11月20日現在、香川大学公式サイトトップページに「大学紹介 MOVIE」としてアップロードされている。冒頭部分がRadio18の学生である。

参考文献

- 井上悟・三浦房紀（2007）『成功するコミュニティ FM 放送局』東洋図書出版。
- 松井一洋ほか（2011）『こちらは FM ハムスター：地域コミュニティの未来を担う小さな一歩（広島経済大学研究双書）』ジャパンインターナショナル総合研究所。
- 山本珠美・藤本佳奈（2014）「香川大学生によるラジオ番組制作（Ⅱ）～正課・正課外教育における FM 高松コミュニティ放送との連携～」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第19号、63－82頁。